

目次

世紀の犯罪

5

訳者あとがき

291

解説 阿部太久弥

295

主要登場人物

- サッチャー・コルト……………ニューヨーク市警察本部長
アンソニー（トニー）・アボット……………コルトの秘書、本書の語り手
マール・ドアティ……………地区検事長、コルトの旧友
ティモシー・ビーズリー……………聖ミカエル及諸天使教会の牧師
エリザベス・カーテンウッド・ビーズリー……………ビーズリー牧師の妻
ジエラルド・カーテンウッド……………エリザベスの弟、〈ゼネラル・アクセプタンス銀行〉副
頭取
パディントン（パディ）・カーテンウッド……………エリザベスの弟
エヴリン（エヴィ）・ソーンダース……………ビーズリー牧師の元秘書、聖歌隊隊員
ウイリアム・ソーンダース……………エヴリンの夫、警備員
イザベル・ソーンダース……………エヴリンの娘
アレクサンダー・パウエル大佐……………弁護士
エラリー・チャドウィック……………教区委員長
ホートン……………教会の雑役夫
ウォルター・ミールینگ……………パウエル大佐の従者
ベッシー・ストルーバー……………ビーズリー牧師の元秘書
エマ・ヒックス……………ビーズリー牧師の秘書
ハーマン・クラウス……………サンクスター・テラスの管理人
バジル・ウォートン……………サンクスター・テラス一三番の家主
ブランチ・ラブル……………喫茶店主、占い師
ニール・マクMahon……………コルトの専属運転手
マルトウーラー医師……………次席検死官

世紀の犯罪

サッチャー・コルトの傑出した後継者である、ニューヨーク市警察本部長エドワード・P・マル
ルーニー(一九三〇—
一九三三年在任)に、著者より称賛の気持ちをこめて本書を捧ぐ。

序文 世紀の犯罪

ニューヨーク警察史に残る刑事事件と言えば、神学博士テイモシー・ビーズリー牧師と、美しき聖歌隊隊員エヴリン・ソーンダースの変死であることに議論の余地はない。

犯罪鑑定家の目から見て、このビーズリー／ソーンダース事件は、あらゆる点で過去の未解決事件——ドット・キングのクロロホルム中毒死、エルウエルの射殺死、ロススタインの暗殺死、あるいはクレーター判事の失踪——をしのご怪事件である。ニュージャージーのホール／ミルズ殺人事件とは関係者の家族構成が似ているし、ウエストニュートンの極悪非道なりチェソン事件とも細かな類似点が見られる一方で、謎の独自性においては、やはりビーズリー／ソーンダース事件が頭ひとつ抜けている。

技巧を凝らした犯行の手口は、他の事件とはひと味もふた味も違っていて、その道の達人でなければ成し遂げることも、適切に評価することもできない完成度の高さを実現している。さらに、歴史に名を刻む多くの凶悪犯罪とは異なり、技術的に優れているだけでなく、大衆の心をわしづかみにする魅力を持ち合せているのもこの事件の特徴のひとつだ。当時、これほど世間の興味や想像をかきたてる犯罪は他になかった。無残に殺害されたふたつの死体は、謎解きの醍醐味を味わわせてくれるが、その裏には狡猾で底の知れない頭脳や、反社会的知性、想像を絶する残忍性、邪悪さ、高度な遂行能

力が潜んでいて、見たところ捜査当局の手は届きそうにない。

風俗、家族、高教会派、警察、政治といった要素が複雑にからみ合う事件にこそふさわしい名前がつけられ、いまもそう呼ばれている——それが『世紀の犯罪』である。

国じゅうの熱い視線が注がれるなか、捜査は行われた。若い素人探偵やレポーターや新聞記者の群れが警察に押し寄せ、法と秩序が侵害されたことに対する速やかかつ明確な報復を行うよう要求した。関係者全員が事件への関与を疑われ、そのなかにはティモシー・ビーズリー牧師の妻も含まれていた。白髪頭で、厳格で、感情を表に出さない彼女のことを「冷淡で冷酷な未亡人」と揶揄するタブロイド紙もあった。やがてしびれを切らした大衆は当局にさえ疑いの目を向けるようになる。憤慨した改革論者はまたしても正義が買収されたと抗議の声を上げ、犯行の動機を有する者たちが彼らに同情的な親族の莫大な富に守られているとの疑念が持ちあがり、容疑者に地元の名士が数多く含まれているため事件がもみ消されるのではないかという憶測が飛び交った。その一方でプロパガンダが流布しているとの声が上がリ、牧師とその愛人が殺害されたのは自業自得であるとの意見が囁かれるようになる。一部の高潔で徳の高い市民（たぶん彼らは私生活に後ろ暗いところがひとつもないのだろう）が、この考えを支持し、誰も罰するべきでないと大胆にも主張する。しかし、こうして物議を醸した警察の捜査が終了したあとも、依然として事件の真相は明らかにされていない。

牧師とその愛人を殺害した罪で、まだ誰も電気椅子送りになっていないのは事実だし、明らかに捜査の幕は下ろされた。とはいえ、お偉方にもみ消されたわけでも、愚かな連中に台無しにされたわけでもないことは、事件の内情に最も通じている人々が一番よくわかっている。

実のところ、当局は真相を知っていたのだ。

ニューヨーク市警察本部長のサッチャー・コルトは、ティモシー・ビーズリー牧師とエヴリン・ソーンダースを殺害した犯人を知っていた。驚くべき早さで殺人者の正体を見抜いただけでなく、ビーズリーとソーンダース夫人がいつ、どこで、なぜ殺害されたのか、そしてその行為を誰が共有しているのかを突き止めたのである。

ではなぜ、突き止めた事実は公表されなかったのか？

その理由がいまここで初めて語られる。ごく最近、事の真相を公表することで最も影響を受けるふたりの人物がこの国から旅立った。彼らは名前を変え、異国で生涯を終えることになるだろう。それゆえに、わたしはようやく真実を余すところなく語る事ができるのだ。わたしの前作 *The Murder of Geraldine Foster* を読んだ方々は、ニューヨーク市でサッチャー・コルトが警察本部長をつとめていた数年間、わたしが彼の腹心の秘書をつとめていたことを覚えていることと思う。彼の秘書としてわたしは、ビーズリー／ソーンダース事件を含めていくつかの怪事件の捜査に関わった。本書は、そのときどきに現場で書きとめた公式記録をもとに、複雑にからみ合った悲劇の糸を本部長がどのように解きほぐしていったのかを記したものである。

アンソニー・アボット

第一章 奇怪な積荷

ふたつの死体が発見されたのは、数年前の六月初旬、気の早い夏の到来を思わせる夜のことだった。わたしがその夜を記憶しているのには明確な理由がある。牧師と聖歌隊の女が殺害されたのとはほぼ同時刻に、南米航路の定期船（ユークシン号）が、フロリダ・キーズ諸島沖で、大勢の乗客もろとも沈没したのだ。しかし、マンハッタンの警察官と聖職者があの風のない蒸し暑い夜を思いだすとき、まさきに頭に浮かぶのは、制服を着たパトロール警官がニューヨーク市内を駆けまわって、聖公会系の牧師館の呼び鈴を片っ端から鳴らしてまわり、寝ぼけ眼まぶさの福音の師をベッドから引きずりだすという、前代未聞の椿事だろう。

いずれにせよ、うだるような暑さに見舞われたその月曜日の終わりに、善良なる市民の眠りを妨げるような事態が出来るとは、当の警察も予想していなかった。涼気をもたらす雷雨の到来を誰もが待ち望むなか、サッチャー・コルトとわたしは、センター・ストリートのニューヨーク市警察本部ビル北端に位置する本部長室で仕事にいそしんでいた。

コルトは例のごとく、まわりつくような暑さを気にもとめていない様子だった。ニューヨークじゅうがシャツ一枚で汗だくになっているときに、コルトは白いフランネルのズボンに濃紺のジャケツトをはおり、白いシルクのシャツに青いネクタイを締め、汗ひとつかいていないように見えた。兵士

を思わせる精悍な顔は曇りなく澄み渡り、意欲に満ちている。緑の傘つき電気スタンドが放つ白い光のもと、コルトは机の上に身を乗りだして、タイプされた原稿を読みふけていた。

不意に、彼がわたしの名を呼んだ。

「トニー」

「なんでしよう、本部長」

「手紙を一通書いてくれ。帰宅前に署名できるよう、至急頼む。第二本部長代理に指示したいことがあってね。例の婦人団体のお偉方が知ったら、頭から湯気を立てて怒るだろうが」

「用意できました、どうぞ」

「本部長代理にこう伝えてくれ。現在のような天候が続くかぎり、タクシー運転手に上着の着用を強いる規則は無効とすべし。まったく馬鹿げた規則だよ、喜ぶのは一部の口うるさい婦人方だけだ。それでいて当人たちは、ごくわずかな布きれしか身に着けていないんだからね。警察という組織は往々にして、馬鹿げた規則を守らせることに時間を費やしすぎるくらいがある。老神父が贖罪として枯れ枝に水を与えつづけるのと同じくらい無益な行為だ。そんなひまがあったら、一件でも多く事件を解決するべきなのに」

コルトは憂いを含んだ目を手元の原稿に戻した。明日、シラキュースで開催されるニューヨーク州警察署長会の年次会議に出席し、その原稿をもとに講演をする予定だった。彼が講演で取りあげる「ムラーージュ」と呼ばれる新技術は、ウイーンの前犯罪学者フェルディナンド・ワツェック博士によって警察の捜査に導入された。証拠を蠟ろうや石膏で型取りすることによって、犯罪を解決に導く画期的な手法である。コルトはそれに独自の改良を加えているが、その改良した方法を公の場で説明するのは

これが初めてだった。

コルトが原稿に手を入れてあるあいだ、わたしは彼のもとに続々と届く捜査報告書の整理に追われていた。目の前で山を成す書類には、長い一日に起きた犯罪が詳細に記されている。ブロードウェイ百十二丁目子どもが連れ去られた、裕福な女が万引きで逮捕された、大量のコカインとハッシッシがロングエーカー・スクエア(現在のタイムスクエア)に入荷するとの噂——さらには性的倒錯行為や信用詐欺、強盗、ギャングの動向等々が脈絡なく入り混じっている。

書類を仕分けしていると、オフィスのドアが静かに開いた。足音を立てずに入ってきたのは、部長室の出入りを司る銀髪の守護者、イスラエル・ヘンリー警部だった。警部は咳払いを言った。「失礼します、本部長。いま電話で報告が入りました」

「うん、ヘンリー？」

「イースト川を漂っていた手漕ぎボートにモーターボートが衝突し、モーターボートに乗っていた男の悲鳴を聞いて駆けつけた巡視艇が、その手漕ぎボートをベルヴェー埠頭へ曳航したところ、二名の遺体に乗っていたそうです」

「ギャングか？」

「いえ。牧師らしい身なりの男と、もうひとりとは女です」

「他殺かね？」

「その点は間違いありません」

一瞬、コルトの眉間に深い皺が刻まれた。この二年、休むことなく骨身を削って働いてきたコルトは、主治医から休息が必要だと言われていた。シラキュースでの会議のあと、一カ月ほど休暇を取っ

て、カナダの荒野へ冒険の旅に出かける予定だった。心ここにあらずといった様子で、コルトは吸取紙の上の小さな象牙の像を手にとった。ギリシャの詩人ホメロスをかたどったその像を、コルトはときどき思いついては手に取って、愛おしげに眺めていることがある。あたかもそれが予言めいた知恵を授けてくれるテラピム（古代ヘブライ民族の家の守護神として崇拜された偶像）であるかのように。

「行くべきか、留まるべきか」コルトはそうつぶやくと、手にしていた盲目の老詩人の像をひっくり返し、頭を下にして机の上に置いた。「何があつたにせよ、福音の師と婦人が殺害され、ボートで川を漂っていたわけだからね。放っておくわけにはいかないだろう」象牙の像をインク瓶の隣に戻すと、きらりと光る目をわたしに向けた。「トニー、残念だが、きみの休暇をぶち壊しにすることになりそうだ——わたしの休暇もね！」

コルトが呼び鈴を鳴らすと、待ち構えていたように速記者のチェンブリスが現れた。

「電報を頼む。『ニューヨーク州シラキユース市ホテル・オノンダガ、ニューヨーク州警察署長会会長殿。緊急事態により会議への出席叶わず。会員諸氏に遺憾の意を表明するとともに、会議の成功を祈る』。すぐに送ってくれ、チェンブリス」

コルトはメッセージを口述しながらバナマ帽とステッキを手に取り、ボンペイのしづく型花瓶から白いクチナシの花を一輪抜きとると、それをジャケットの下襟に挿した。

「死体はいまどこにあるのかね？」

「まだボートの上です。二十九丁目の死体安置所の船着き場に係留されています。検死医に出勤を要請し、目下、マルトウラー医師が現場へ向かっています。関係各署へはこれから連絡します。現場で見張りに立っているハリス巡査と直接話しました。誰にも指一本触れさせていないそうです」

「他には誰も寄越さないでくれ、わたしが指示するまでは。そのときが来たら、アボット君を通して連絡する」

エレベーターに乗りこむと、コルトは気遣わしげにわたしを見た。

「たしか、今夜きみはコッド岬まで車を飛ばして、ベティ・キャンフィールドに会いにいく予定だったね」

「いまはそれどころではありませんから、本部長」

コルトはわたしの心中を慮るように深くうなずいた。

「仕事とはいえ、つらいところだ。でもまあ、ひよつとするとすぐに片がつくかもしれない。じきにわかるだろう」

ブルーム・ストリートの車寄せでは、本部長の専用車が待機していた。いつでも出発できるよう、すでにエンジンは小気味のよい音を立てている。運転席に座っているのは、皿のような平べったい顔に無表情を貼りつけたニール・マクマホンだ。コルトの専任運転手であり、数多くの怪事件で豪胆ぶりを発揮してきた仲間でもある。ニールは独自の情報網を駆使して、本部長がやってくることを前もって察知していた。

「ベルヴェー埠頭だ」コルトは告げるのと同時に車に飛び乗り、わたしもあとに続いた。次の瞬間、すでに車は走りはじめていた。サイレンを鳴らしながら赤信号を次々と突っ切り、行き交う一般車両に足止めを食らわせて、アップタウンに向かって突き進んでいく。

コルトは普段と変わらず無口で、無謀な運転に身を任せたまま、ひと言も発しなかつた。瞬く間に車はベルヴェー病院と死体安置所の近くまで来ていた。二十六丁目の河岸近くに、ドーム型の屋根を

頂いた建物が、蒸し暑い闇夜に黒々とうずくまってみえた。忌まわしい記憶が染みついた旧死体安置所だ。数年前、タマニー派の指導者だったビッグ・ティム・サリバン（ニューヨークの政治家。一九一三年、列車に轢かれて五十一歳で死亡。誤殺説もある）が変わり果てた姿で運びこまれたときは、保管期限寸前に身元が判明したものの、氷の上に寝かされた死体の多くは、身元不明のまま葬られる運命にあつた。その丸屋根の不気味な古い建物は、いまはもう使われていない。

車が初めて停止したのは、二十九丁目と一番街の角、ベルヴュー病院の広大で陰気な建物の前だつた。その角から南は二十六丁目、東は川岸にまで及ぶ病院の十二エーカーの矩形の敷地には、悲嘆と絶望と慈悲が渾然一体となって渦巻いている。

煌々たる明かりに照らされて、労働者の一団が夜間作業に追われていた。ベルヴュー病院精神科の新病棟の基礎を築くべく、岩盤にドリルで穴を開けているところだ。クレイン車が砕いた岩を地中から吊りあげて、獣が獲物をむさぼり食らうように、雲母や方解石や石英を次々と呑みこんでいく。車は西行きの大通りを東二十九丁目に折れて、速度を落としたまま川へと向かった。人を寄せつけない霧囲気の建物——新モルグと称される死体安置所——の脇を通過して、突き当たりまでさらに進み、黒いブロック塀に設けられた通用口の前で車は停止した。すぐさまコルトが飛び降り、わたしも慌ててあとに続いた。薄暗い通用口の向こうに棧橋が見えた。ほのかに光る水面に百フィートほど突きだした棧橋は、まるで恐竜の丸い背中のようなだ。河口特有の匂いがわたしの鼻孔をくすぐった。気分を高揚させてくれる、爽やかな潮の香りだ。

コルトは小声でニールに指示を与えると、わたしにうなずいてみせた。それを合図に駆け足で通用口を通りぬけ、棧橋へ向かった。埠頭のアーチ形の外灯に照らされながら無言で棧橋を進み、半分ほ

ど来たところで制服警官に制止された。長身で赤ら顔の青い目をした真面目そうな男だった。コルトが所属と名前を告げると、警官は前に進みでて、軍隊式の敬礼をした。

「カーター巡査部長です、コルト本部長」

「状況を説明してくれ、カーター」

「三十分ほど前でしようか、トウイストルという若者が、ベラ・ブルームという恋人を連れてモーターボートを走らせていたところ、手漕ぎボートと衝突し、そのブルームという娘がぶつかつたボートの積荷を見るなり、悲鳴を上げて気を失い、何事かとボートのなかをのぞきこんだトウイストル青年もまた、びっくり仰天して腰を抜かしたそうです」

このとき、別の人物が合流した。背は低い、しなやかな身ごなしのその警官は、海事課の巡視艇〈ジブシー号〉の指揮を執るスローン巡査部長だと名乗った。

「状況を説明してくれ、巡査部長」コルトはパイプを取りだした。

「われわれはちょうど任務についたところでした——夏時間になつて、勤務スケジュールに若干混乱が生じているもので。棧橋Aを出航し、イースト川上流に向かつて低速で航行中のことです。万事異常なく、滑りだしは上々、と思いきや、悲鳴が聞こえたため、ミンツ巡査に舵を任せて、探照灯で前後左右を確認し、ほどなく二艘のボートを発見しました。場所はチューダー・シテイ沖で、二艘は衝突したらしい。わたしは現場へ急行し、そこで驚くべき光景を目にしました。手漕ぎボートにはふたつの死体、モーターボートでは若い女が気を失つていて、かたわらでへたりこんでいる男は恐怖で歯の根が合わない有様でした。その後、手漕ぎボートをロープで繋いで埠頭へ曳航し、居合わせたカーター巡査部長とハリス巡査が本部に報告したというわけです」

コルトは慣れた手つきでパイプにタバコを詰めていた。

「トウイストルとその恋人は？」

「病院の救急病棟です。娘のほうは手当てが必要でしたので」カーターが説明した。「ショックで寝こんでいます。病棟にはウィルソン巡査を配置し、ふたりから目を離さないように指示してあります」

「死体を見せてもらおう」パイプに火をつけたあとでコルトが言った。

カーター巡査部長はわれわれを棧橋の突端へ案内した。見張りに立っていたハリス巡査は、快活そうな顔の若者で、小気味よい敬礼をしたあと、すぐに無表情な立哨の体勢に戻った。

「マルトウラー医師は到着したかね？」コルトがたずねた。

「いいえ、まだ誰も来ておりません」ハリスが答えた。「どうぞこちらへ」

巡査部長に導かれて、棧橋の際まで進んだ。われわれの前方では、きらびやかな水上シヨールが繰り広げられていた。明かりを灯した船が幻想的な行列を作り、油を流したような川面を行き来している。その光景はさながら夢のなかで音のない映像を見ているかのようだった。川の対岸ではグリーンポイントの街灯りが瞬き、北の方角にはウエルフェア島のシルエツトがぼんやりとかすんで見えた。生ぬるい空気と闇に包まれて立つわれわれの耳に、波が棧橋に打ち寄せる、静かだが力強い音が足元から聞こえてきた。

「ここは柵がありませんので」カーター巡査部長が注意を喚起した。

われわれが立っている場所から、死体を積んだボートは見えなかった。酔っぱらいのように波に揺られている赤い小型のモーターボートは、トウイストル青年とブルーム嬢がロマンティックな一夜を

過すはずだった船にちがいない。この弱々しいプレジャーボートの隣に定期船のごとくそびえているのが、全長六十フィートの巡視艇（ジプシー号）——必要とあらば、時速三十五ノットで追跡可能な警察船隊の女王だ。船体の両側に他船を引き寄せるための引っかけ鉤が備わっていて、前方の帆布で覆われた部分には機関銃の銃口が隠されているのが見てとれた。操舵室のドアの前に立つ巡査が、額の汗を制服の袖口でぬぐっていた。

コルトは大きく身を乗りだして棧橋の下をのぞきこんだ。ポケットから懐中電灯を引っ張りだし、スイッチを入れると、棧橋の横に渡された水平桁の上に無言で降りた。波しぶきに濡れた橋桁は、見るからに滑りやすそうだ。わたしも急いであとに続いたが、すでにコルトは懐中電灯を手にしやがみこんでいた。明るい光の輪が照らしているのは、見るもおぞましい光景だった。橋脚にロープで係留された平底の手漕ぎボートが、荒波に揉まれて不安定に揺れ動いている。緑のペンキは塗りたてのようだ。この不格好な小舟の底に、男女ふたりの死体が仰向けに横たわっていた。

忌まわしい事件が発生したことは、死体をひと目見ただけでわかった。男のほうは背が低く、小太りで、年齢は三十そこそこ。髭のない丸い顔から、かっと見開かれた目がこちらを見あげていて、懐中電灯の明かりを反射すると、生命に似たものを宿しているように見えた。広く秀でた額に銃創があり、ふさふさした茶色の巻き毛は血で固まっていた。傷からあふれた血は顔面に広がり、聖職者の白いカラーにしたたり落ちて、黒いベストを汚していた。

男のかたわらに横たわる女は、まるで眠っているようだった。美しい顔は穏やかそのもので、犯罪に巻きこまれた痕跡はどこにも見当たらない。彼女は若くて美しかった。量の多い金髪を顎の下で切りそろえ、青いリボンのヘアバンドをつけている。彼女の左半身、青いシルクの上のドレスの上に広がる

〔著者〕

アンソニー・アボット

本名チャールズ・フルトン・アワスラー。1893年アメリカ、メリーランド州ボルチモア生まれ。法律を学んだのち、リポーターの仕事や、様々な雑誌の編集をしながら執筆活動を始め、ミステリの短編が、〈ディテクティブ・ストーリー・マガジン〉や〈ミステリー・マガジン〉に掲載される。シリーズ探偵のNY市警察本部長サッチャー・コルトを創作した。1952年死去。

〔訳者〕

水野恵（みずの・めぐみ）

翻訳家。訳書にJ・S・フレッチャー『亡者の金』（論創社）、ロバート・デ・ボード『ヒキガエル君、カウンセリングを受けたまえ。』（CCCメディアハウス）、ロバート・リテル『CIAカンパニー』（共訳・柏艸舎）、ハリー・カーマイケル『アリバイ』（論創社）などがある。

せい き ほんざい
世紀の犯罪

——論創海外ミステリ 235

2019年6月20日 初版第1刷印刷

2019年6月30日 初版第1刷発行

著者 アンソニー・アボット

訳者 水野恵

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1844-3

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

クラヴァートンの謎◎ジョン・ロード

論創海外ミステリ 228 急逝したジョン・クラヴァートン氏を巡る不可解な謎。遺言書の秘密、降霊術、介護放棄の疑惑……。友人のプリーストリー博士は“真実”に到達できるのか？ 本体 2400 円

必須の疑念◎コリン・ウィルソン

論創海外ミステリ 229 ニーチェ、ヒトラー、ハイデガー。哲学と政治が絡み合う熱い論議と深まる謎。哲学教授とかつての教え子との政治的立場を巡る相克！ 元教え子は殺人か否か……。 本体 3200 円

楽園事件 森下雨村翻訳セレクション◎J・S・フレッチャー

論創海外ミステリ 230 往年の人気作家 J・S・フレッチャーの長編二作を初訳テキストで復刊。戦前期探偵小説界の大御所・森下雨村の翻訳セレクション。[編者=湯浅篤志] 本体 3200 円

ずれた銃声◎D・M・ディズニー

論創海外ミステリ 231 退役軍人会の葬儀中、参列者の目前で倒れた老婆。死因は心臓発作だったが、背中から銃痕が発見された……。州検事局刑事ジム・オニールが不可解な謎に挑む！ 本体 2400 円

銀の墓碑銘◎メアリー・スチュアート

論創海外ミステリ 232 第二次大戦中に殺された男は何を見つけたのか？ アントニー・パークリーが「1960年のベスト・エンターテインメントの一つ」と絶賛したスチュアートの傑作長編。 本体 3000 円

おしゃべり時計の秘密◎フランク・グルーバー

論創海外ミステリ 233 殺しの容疑をかけられたジョニーとサム。災難続きの迷探偵がおしゃべり時計を巡る謎に挑む！ 〈ジョニー&サム〉シリーズの第五弾を初邦訳。 本体 2400 円

十一番目の災い◎ノーマン・ベロウ

論創海外ミステリ 234 刑事たちが見張るナイトクラブから姿を消した男。連続殺人の背景に見え隠れする麻薬密売の謎。三つの捜査線が一つになる時、意外な真相が明らかになる。 本体 3200 円
